

序

第二次世界大戦後の新生日本文化建設の諸動向のなかに、日本児童文学学会が結成されたのは一九六二年（昭37）であった。もっとも関連性のふかい先進学会、日本近代文学会の創立よりおくれること一〇年の時点であった。ひろく児童文学研究者の結集を図り、研究をふかめて児童文学の発展に資することを主目的とする学会として出発した。

明治・大正期を通じて、ごく少数の神話学者・民俗学者・国文学者・児童研究家が伝承昔話を主として開拓的研究をおこなった。他の創作お伽噺や童話研究者の数は少なく限られていた。戦時期は統制による少国民文化・文学の一時的なもりあがりを反映して「少国民文化」研究所が設立されたが、短命に終わった。戦後、研究の自由のなかで海外の近現代文学のさかんな移植に刺激を受け、研究活動も漸次活発化する状況が生まれてきた。本学会創立のころには、教育系大学や国文学系大学をはじめとして、児童文学・児童文化の講義が開講されつつあって、児童文学研究者も漸増の傾向にあった。学会の創立によって、その研究活動にも刺激を与えることになった。日本児童文学研究も海外児童文学研究も意欲的な新進研究者の漸増を見、研究領域がひろがり、研究方法にも視野が開かれ、多様化する方向をたどってきた。新資料も掘り起こされつつあって、研究の質もようやく向上線をたどってきている。

一九八七年（昭62）本学会は、創立二五周年記念を迎え約三〇〇名の正会員が児童文学研究の重要性を確信しつつ研究活動を推進し、着実にその成果を積み重ねている。機関誌「児童文学研究」や学会編集の出版物のほか、三ブロック（関東・関西・中部）の月例研究会、年次研究発表大会などを通して、研究成果を発表し、相互の研究啓発の機会として活動しつつある。

さらに、今後の課題として、海外の児童文学研究者と交流し連繫をはかり、比較児童文学研究・共同研究・学際的研究の領域も開発していかねばならないだろう。すでにその研究動向も顕在化しつつある。叙上のような状況のなかで、児童文学研究に関心をもつ人々にとって、必要とする知識と情報はいよいよ増大の傾向にあることはたしかな事実である。この要望に応えるべく本学会内に創立二五周年記念事業の一つとして、『児童文学事典』の編集刊行が決議され編集委員会が成立したのは、五年前のことであった。以来、編集委員会は、出版社編集部と共に企画・立案・方針審議から項目選定・適切な執筆候補者のリスト作成・執筆要項の決定・執筆依頼・原稿整理・照合・校正等に至るまでたゆみない努力を傾注した。ようやくここに出版の運びとなったことは、関係者一同の大きな喜びである。

本事典は、日本と海外の児童文学事象を二四〇四項目選択し、三一五名にのぼる学会内外の執筆者の協力を得て、机上常備の一冊本として編集することができた。

内容は慎重な審議を経て日本人名（一一四七項目）、海外人名（七〇四項目）、雑誌・叢書・新聞・団体・事項（五五三項目）を収め、児童文学と密接にかかわる児童文化項目をも含めた。海外人名項目は、日本

の児童文学の発展に影響をおよぼした作家を中心に、比較文学の領域にも目を配って選定した。さらに欧米以外に児童文学が発展しつつある諸国にまでおよんでいる。このほかに、日本および海外の児童文学・児童文化の歴史的動向を示す「世界児童文学史」、「参考文献一覧」、「児童文学年表」、「索引」を収載して活用・探究の利便を図った。また、表現の面にあつては、簡潔平明を期し、実証的客観性を重んじ、異論・異説のあるものは公正な立場において記述することを心がけ、主観的に偏傾することを努めて避ける努力をした。以上の諸点は、すでに絶版となつている先行数種の児童文学事典（辞典）を超える特色といふことができるだろう。

われわれ編集委員の願望のなかには、本書が図書館・学校図書館・大学研究室などの基本図書の一冊として価値あるものとすべき編集努力・志向がはたらいていた。もし、そうした評価が得られ活用されるならば、日本児童文学学会のよろこびだけにとまらずに、児童文学ならびに児童文学研究への社会的関心のいっそうの向上に役立つにちがいない。また、ひろく児童文学愛好者や読書指導・文学教育にたずさわる人々の研究意欲・興味を刺激することができるならば、まことに幸いである。同時に、児童文学研究者が日常座右の書として愛用されるならば、日本児童文学学会創立記念事業として企画した一半の責務を果たすことになるだろう。そのような期待と願望をいだきながら本書を世に送ることができたのは、多くの関係者による協力のためのものであった。心ふかく感謝申し上げるしだいである。なかでもご多用中にもかかわらず責任をもって執筆くださった方々、項目選定にご助言をたまわつた編集顧問の方々、多くの貴重な

助言をいただいた編集委員の方々、時には夜を徹して細心の尽力をしてくださった常任編集委員の方々（いずれも別記）に深甚の感謝をささげたい。また、本書の出版をお引受けくださった書肆東京書籍出版編集部の諸氏が、常任編集委員と一体となって緻密な編集とすぐれた出版技術を発揮してくださった。特に明記して感謝の意を表するしだいである。

十全を期して編集に立ち向かうことはできるが、十全の結果を視ることはむずかしい。読者諸氏のご批判、ご教示にあずかることができるならば幸甚に存するしだいである。いつの日にか、改版の機至るときには、修訂増補して、十全を期そうということが、編集委員全員の願望であらう。

一九八八年三月

日本児童文学学会会長

『児童文学事典』編集委員代表

滑川道夫